ミュージカル『夏花火（なつはなび）♥恋名残（こいのなごり）』

作・中屋敷法仁

◆登場人物

・竹本花之助　たけもとはなのすけ　芸人。女義太夫の太夫。女２０歳。
・鶴澤花丸　つるざわはなまる　芸人。女義太夫の三味線。女１８歳。
・竹本染之助　たけもとそめのすけ　花之助と花丸の師匠。女４０歳。
・玉屋おたま　たやまおたま　花火屋の娘。女１６歳。
・新門辰五郎　しんもんたつごろう　町火消し。男３２歳。
・逢阪屋花鳥　おおさかやかちょう　花魁。女２８歳。
・佐原喜三郎　さわらのきさぶろう　やくざ者。男３５歳。
・芝晋輔　しばしんすけ　狂言作者。男２５歳。
・遠山景元　とおやまかげもと　江戸北町奉行。男４９歳。

その他、芸人、町人、同心、花魁、町火消し等。

◆とき　天保十三年（１８４２）。春。
◆ところ　江戸

※「**斜体**」の部分は歌唱

【1】芝居小屋

さまざまな芸人たちが芸を披露している。
それの芸に、熱狂している江戸の町人たち。

町人　心　おどりだし　胸がときめく
なんて愉快な　エンターテイメント
瞳　かがやいて　拍手がとまらない
なんて素敵な　エンターテイメント
誰も　彼もが　幸せになる　熱い想いで満たされる
あぁ 生きてるって素晴らしい
永遠に終わらない　エンターテイメント

遠山　そこまでだ！

客席に現れた遠山景元と同心たち。

遠山　心　沈みっぱなし　胸はむかむか
なんてくだらぬ　エンターテインメント
まぶたは重くなる　あくびがとまらないい
なんてつまらぬ　エンターテインメント
あちら　こちらで　日照りが続き　民百姓は飢えている
あぁ 生きるのって大変だ。
今すぐにやめちまえ　エンターテイメント

遠山　とらえよ！

遠山と同心たち、芸人たちを捕らえる。
恨めしそうに見つめる町人たち。

町人　いい気がしねぇ　生きづれぇ　粋じゃねぇ　息しづれぇ
腹がたつ　腹がたつ　はらはら流れる　涙の波だ

その様子を見ていた芝晋輔。客席に向かって語り出す。

晋輔　おいらの名は芝晋輔　歌舞伎の戯作者（げさくしゃ）志す
天下御免の道楽者　ほんの一時のおつきあい。
まさに今の世は　貧乏　貧乏　飢え死に　野たれ死に
そこで　お上が　おしつけた　ケチな世直し　倹約令
「贅沢は敵！　娯楽はダメだ！　芝居小屋は取り潰せ！」

晋輔　おもしろいもんは　どんどんなくなっちまう。

町人　いい気がしねぇ　生きづれぇ　粋じゃねぇ　息しづれぇ
腹がたつ 腹がたつ はらはら流れる 涙の波だ

去っていく町人たち。晋輔ひとり残り、

晋輔　義太夫ってのは知ってるかい？　義太夫ってのは語り物。
べんべんべんの三味線の、音色に合わせて義太夫が、語る人情の物語。
オイラたちの歌舞伎とはちょいと勝手が違う。
もとは浪速の芸だった。今や江戸でもそりゃ人気。
だが…何しろ、こんな世の中だ。義太夫だって もちろん 御法度。
中でも「女」の義太夫は、厳しく禁じられた。
時は天保十三年春。所はお江戸！

【2】牢屋の外

女義太夫の芸人たち、廊下から出される。
その中に花之助、花丸の姿。
遠山と同心たちが囲んでいる。

遠山　女。女。出てこい、女ども。お役御免だ。
花之助　自由なんだね。
遠山　違う。家には帰してやるが、これまで通りの生活は　許さぬ。
義太夫を　語ったり、三味線を弾くなど　もってのほか
女のくせに　女のくせに　人前で芸をするなど　もってのほか
芸の道は諦めて　まともな暮らしを送るのだ。

花之助　まともってのは何なんだい？
遠山　女らしい暮らしだ。
花之助　女らしいって何なんだい？
遠山　亭主に仕え、子供を産み、家の奥で働く。
それが女らしい、まともな暮らしだ。
花之助　笑わせるんじゃねぇ。俺は女である前にひとりの芸人だ。
生きたいように生きる。義太夫こそ
花丸　三味線こそ。
花之助　俺たちらしい暮らしだ。
遠山　女。女、やいやい、女ども。
世の風紀を乱れに乱れさせた、罪の重さを忘れたか。
花之助　牢屋にブチ込まれた、この１００日間。
花丸　命よりも大切な、三味線を燃やされた。この恨み、
花之助　忘れるわけねぇだろ。
遠山　老中・水野忠邦様の世直し。その目的がわからんのか、女。
花之助　女、女、やいやい女。だと？
俺には名がある。お師匠からいただいた、立派な名前が。

女たち　とうざい。とうざい。語りまする大夫、
花之助　竹本花之助（たけもとはなのすけ）。
女たち　相三味線、つとめます
花丸　愛くるしい私、鶴澤花丸（つるざわはなまる）。
遠山　俺の名は遠山。
同心　江戸北町奉行、遠山左衛門尉景元。
遠山　忘れるなよ俺の名を。
花之助　偉そうに。俺はよ、医者と坊主と侍が、大っ嫌えなんだよ。

遠山　生意気な女。とその相棒。
お前たち二人だけは、釈放まかりならん。また牢にブチ込んでやる。

花之助　義太夫が語れないのなら
花丸　三味線が弾けないのなら
花之助　このお江戸なんて、牢屋も一緒。
花丸　釈放なんて
花之助・花丸　片腹痛ぇ。

同心　奉行様に対する罵詈雑言の数々、切り捨て御免もやむなし。
花之助　面白ぇ。そんな細っこい人斬り包丁、怖がるような俺と思ったか。
やいやい、ひょうたん野郎。やれるもんならやってみやがれ。

竹本染之助、登場。

染之助　おやめなさい。
おつとめの方々に、なんたる振舞い。

花之助　しかし、師匠…。

染之助　師匠だなんて　呼ぶのはおよし。
みっともない弟子などを、もってない。
遠山　お前は、竹本染之助。
同心たち　12歳で義太夫の世界に入った
御歳40の最長老。

染之助　お奉行様。我が門弟のご無礼、お許しください。
遠山　たとえお前の頼みと言えど、こやつらの無礼、見逃す訳にはいかん。
染之助　子の不始末は　親の責任。
どうか、どうかこれで、ご勘弁を。

染之助、自らの歯で手の爪を一枚剥ぎとる。

花之助・花丸　お師匠さま！
女たち　自分の前歯で　指の爪を一枚　剥いだ。
染之助　まだ足りないかい。そうか、あんたたちは二人だったね。
だったらもう一枚…。

染之助　さらにもう一枚、爪を剥ぎとる。

花之助・花丸　お師匠さま！
同心　弟子の命　ゲット
　　情け深い　師匠の　覚悟。

遠山　やめい！　やめい！
　　わかった…。染之助に免じ、命だけは助けてやろう。
　　ありがとうございます。
染之助　しかし、このまま帰すワケにはまいらん。小伝馬町の牢に移す。
遠山　そこでもそっと頭を冷やすのだ。

遠山、退場。

花丸　お師匠さま。どうして…。
染之助　私の爪二枚で、あんたたちの首ふたつ。安いもんだよ。
花丸　お師匠さまの指は天下一の三味線を弾く国の宝。
　　少しでも動きが鈍ったら…。
染之助　その時は花丸。あんたに、天下一になってもらおうかね。
花丸　お師匠さま…。

染之助　聞きなさい　聞きなさい
　　世の中なんて　どう転んじまうかわからない。
　　聞きなさい　聞きなさい
　　だけど世の中と一緒に転んじまうんじゃないよ。
　　世の中の方を転がしてやりな。
　　それが芸人ってもんさ。芸人ってもんさ。
　　その為にも今は、耐えるんだ。
　　耐えて、耐えて、耐えて、耐え忍びながら、
　　己の芸だけは、しっかりと磨いておきなさい。

花之助　はい！
花丸　はい！

染之助　…あんたたちがうらやましいよ。
　　私には、相棒なんていなかったからね。一人で語って、一人で弾いて…。
　　あんたたちは違う。語りと三味線、二人で励まし合える。
　　力を合わせて、生きていくんだよ。
　　この世でたった二人っきりの、姉妹なんだからさ。
花之助　いや、姉妹じゃねぇ、花丸は俺の相三味線だ。
　　芸人になった以上、親も兄弟もねぇ。
染之助　花之助。その意気だよ。達者でな。

花丸　お師匠さま…。

染之助、退場。

花之助と花丸は、同心たちに連行される。

晋輔　なんとも頑固な跳ねっ返り。とその妹。

この二人だけは再び、牢屋に閉じ込められちまった。

【3】小伝馬町の牢

花之助と花丸。

花之助　花丸…。
花丸　姉さん…。
花之助　師匠のお言いつけだ。何としても、何としても、
この芸を磨いていかねぇとな。
花丸　そうだね、姉さん。でも・・・
花之助　でも？
花丸　大切な三味線は、奉行所の奴らに焼かれちまったよ。
花之助　三味線！
花丸　そして床本（ゆかほん）。
義太夫の台本がないと、姉さんだって語れないだろう。
花之助　床本！
花丸　道具がなくっちゃ何にもできない。
花之助　いいや、安心しやがれ、花丸。
道具よりも、もっと大切なものを持ってるじゃねぇか。

花之助　お師匠に助けていただいた　この命
これさえあれば　なんとかなる　なんでもできる
花丸　たとえば　三味線が無くても
花之助　手がある　指がある。
花丸　たとえば床本が無くても
花之助　舌がある　声がある。
花丸　何も無い時代　何も無いこの場所
花之助　それでも　心の中に　広がる　エンターテイメント
花丸　命さえあれば
花之助　心さえあれば
二人　いつでもどこまでも　どこまでも
生まれる　エンターテインメント
やっていけるさ　間違いないさ
花之助　俺たち　ふたりなら
花丸　命さえ
花之助　心さえ
二人　あれば

花丸　…とは、歌ったものの…
やっぱり三味線が無いと何も出来ないよう。
花之助　うぬぬ…。

【4】同場

牢の奥より花鳥、登場。

花鳥　命さえあれば…心さえあれば。ふふふ、こんなトコロに墜ちながら、よくもまぁそんな、前向きなナンバーが歌えるねぇ。ぐにゃぐにゃ、ぐにゃぐにゃ。

花之助　だ、誰だ？

花鳥　あたしの名は逢阪屋花鳥（おおさかやかちょう）。

花之助　花鳥？

花鳥　花鳥風月の「花鳥」さ。

花之助　花鳥だかガチョウだか知らねぇが、そのぐにゃぐにゃ気にいらねぇ。俺はよ、ぐにゃぐにゃした女は大っ嫌ぇなんだ。

花鳥　女のあんたは知らないが、男たちは大好きだよ。こういう、ぐにゃぐにゃした女が。ぐにゃぐにゃ。

花丸　そのぐにゃぐにゃ具合…ただ者じゃない…。花魁ね！

花鳥　命さえあれば、心さえあれば…。しがない花魁の命の話でも、聞いてかないかい。（三味線を取り出す）

花丸　あ、三味線…。

花鳥　**どこで生まれたのか わからない**
親の顔も わからないままに
夜の町、吉原に 売りとばされた私
男に甘えるだけの暮らし
誇りも 何も あったもんじゃないさ
命なんて 心なんて そんなもの 辛いばっかりさ

いつの間にか花鳥の三味線を奪っていた花丸。
夢中で弾き出す。

花之助　親無しなのは俺たちも一緒だ。

花鳥　（花丸に）あ、それ…私の三味線…。

花之助　**「育てられねぇ」と 詰ぴられて**
実の親は どっかに消えた
両国橋の下に 捨てられた 俺たち
そこをお師匠様に拾われ
義太夫 三味線 叩き込まれた
命だけだ 心だけだ それだけで 生きてこれたのさ

花之助　生まれちまったもんは仕方ねぇ。辛くっても生きていくんだ。

花鳥　あんたたち、義太夫なんだね。
なんていい声…それに、なんて奇麗な、三味線の音色だい。

花丸　あ！　ご、ごめんなさい！　三味線を見たら、つい弾きたくなっちゃって…。

花鳥　いいんだよ。
あんたみたいな名人に弾いてもらって、あたしの三味線も喜んでるよ。

花丸　え、やっぱり？（三味線に）お前、喜んでくれてる？

花鳥　女義太夫は今じゃ御法度。それでここに入れられたんだね。

花之助　他に生きる道は無ぇってのによ。

花鳥　あんたたち。ただの女じゃなさそうだ。
瞳の奥に、燃え上がるような志が見える。立派な女だ。

花之助　そ、そうかい。へへへ。

花鳥　あんたたちを、女の中と女と見込んで頼みがある。
私を、喜三郎さんに会わせてとくれ。

花之助　喜三郎？　誰だそれ？

花鳥　歌わせて。

花鳥、歌い出す。花丸、三味線を弾く。

花鳥　**浮き世に捨てられた私は、浮き世を捨てた。**
15になった私は、吉原に　火をつけた
八丈島に島流し。そこで出会った男。
それが佐原喜三郎。彼は任侠　やくざ者。

現れる喜三郎。

喜三郎　ケンカの果てに人を殺め　流れ着いたは　八丈島！

花鳥　**とってもワイルド　だけども知的。エンタメ詳しいアーティスト**
何より、こんなあたしにも　とっても優しくしてくれた。
八丈島での暮らしは幸せそのもの　愛がある
けれど…？

喜三郎　花鳥。花火が見たくないか。

花鳥　花火？

喜三郎　世間の連中と同じように、両国の花火を見たくはないか。
「たまやー」と大声を　出したくはないか。
人並みな幸せを　楽しみたくはないか。

花鳥　惚れた男と花火が見たい。その為なら、この命
棒にふってもかまわない。イカダを作って　海の向こうへ
大波　小波をかき分けて　なんとか江戸へカムバック
喜三郎　いつか二人で花火をと　そこからは愛の逃避行。

花鳥　しかし、運命は二人を分つ
やがて見つかりあっさりお縄、離ればなれの牢屋に…。

喜三郎　花鳥―。（捕えられる）

花鳥の身の上を聞いた花之助と花丸。

花之助　火付けに、島抜けって、とんでもねぇ女だな…。
花丸　あ！ごめんなさい！私ったら、また、ついつい三味線を…。
花鳥　私をもう一度、喜三郎さんに会わせておくれ。
花之助　会ってどうするんだよ。
花鳥　花火が見たいのさ。
隅田川の川べりで、二人して並んで花火を見て、「たーまやー」
それだけが、今の私の望みなんだよ。
あの人は今、どこか遠くの牢屋に閉じ込められてるんだ。
なんとか探し出しておくれよ。会わせておくれよ。
そして花火を見せておくれよ。
花之助　注文が多い女だな…。
助けてやりてぇ気はあるが、俺たちも芸の修行で忙しい。他をあたってくれ。
花鳥　そこをなんとかお願いするよ。その三味線もあげるからさ。
花丸　えっ！　三味線！
花鳥　三味線と引き換えに、この役目、引き受けちゃくれないかい。
花丸　（即答）やりましょう！
花之助　おいっ。俺たちに人助けなんかしてるヒマなんかねぇだろ。
花丸　でも姉さん、三味線が手に入るんだよ。
花之助　三味線がないと、芸もおじゃんだよう。
花丸　それはそうだが…。
花鳥さん、そのお役目、私たちが引き受けました。
必ずや、あなたと、あなたの思い人・佐原喜三郎さん。
花之助　引き合わせてあげましょう。
花丸　頼んだよ。
そして三味線、ありがとうございます！
これ、すごくイイ！カワイイ！（興奮）
花之助　しかし、その喜三郎とかいう野郎、
探そうにも、ここから出られねぇことには…。

花鳥　それなら大丈夫だよ。ほら。

花鳥、鍵を簡単に外してしまう。

花之助　なんだこりゃ？　鍵が外れた…。
花鳥　ささ、見張りが来ないうちに、早く行っとくれ。
花丸　はいっ！

花之助、逃げようとするが、

花之助　（花鳥に）…あんたは逃げないのか？
花鳥　ぐにゃぐにゃな私なんて足手まといなだけさ。
喜三郎さんのこと。頼んだよ。

逃げ出す二人。同心たちの声がする。

同心たち　逃げたぞー。追えー。追えー。

町中を逃げていく花之助と花丸。

花之助　花丸。ここで二手に別れるぞ。
花丸　気をつけてね、姉さん。
花之助　三味線まで譲ってもらったんだ。
芸をさびさせないようにしろよ。
花丸　姉さんもね。

花丸、逃げ出す。

花之助　とは言ったものの、どうする花之助。
義太夫の稽古は、大っぴらにはできねぇぞ。
大きな声を出せる場所を探さねぇと…。
声を出せる場所…はっ。そうだ！　あそこがいいやっ！

逃げ出す花之助。同心たちがそれを追う。
別の場所に遠山、登場。

同心　御奉行。あの二人が、逃げ出しました。
遠山　あの二人？
同心　竹本花之助と、鶴澤花丸です。
遠山　おのれ…竹本花之助…。

晋輔が客席に向かって語り出す。

晋輔　「芸を磨きなさい」という師匠・染之助からの言いつけと、
「喜三郎に会わせてくれ」という花魁・花鳥との約束。
その二つを胸に、牢を抜け出した二人。
一体どうなることやら…
え？　おいら？
おいらは、今しばらく、今しばらくで登場します。

【5】町火消「を組」

辰五郎、おたま。火消しの若者たち。

辰五郎　こんなに涼しい夏は初めてだ。お上の締め上げは容赦ねぇ。
贅沢なモンは何でも禁止、
歌も芝居も御法度とくりゃ、夏だってのに心は寒い。
俺たち火消しの纏も、もっと小さくしろって言ってきやがった。
粋じゃねぇ！　粋じゃねぇぜ、まったく！

おたま　両国、隅田川の川開き、今年はどうなっちゃうんだろう…。
このままじゃ、花火まで禁止になっちゃうってウワサもあるけど…。

辰五郎　おたま、心配すんな。
花火はお江戸の夏の風物詩。暗ぇ世の中を明るく照らす大事なもんだ。
この俺がお上にかけあって、花火だけは、
花火だけはこれまで通り、あげさせてもらうぜ。

おたま　そんなことできるの？

辰五郎　やってみせるさ。それが世の為、人の為。

そこへ登場する花之助。男装している。

花之助　御免よ。御免よ。

辰五郎　なんだ色男。見ねぇ、ツラだな。

花之助　あんたが辰五郎親分かい？

辰五郎　おう。浅草十番組「を組」の頭、新門辰五郎たぁ俺のことよ。

花之助　まどろっこしい話は嫌ぇだ。俺をあんたの組に入れてくれ。

辰五郎　なんだぁ？

花之助　どうなんだい？　入れてくれんのか？

辰五郎　気が短けぇ野郎だな。名前くらい名乗りやがれ。

花之助　名前なんざ何だっていい。クマだのハチだの、そっちで適当に呼んでくれ。
浅草の新門辰五郎は男の中の男。助けを求めて来る者は、
罪人あがりにならず者、どんな野郎でも世話すると聞いている。

辰五郎　そりゃこの辰五郎、男と見込んで頼まれりゃ、飯も寝床も世話してやらぁ。

辰五郎　それが 江戸の火消しの心意気。
てめぇの命は二の次で　誰でも手助け　人助け

花之助　名無しの宿なし銭なしの、無い無い尽くしで情け無ぇ。
俺は火消になりてぇ。あんたの組に入れてくれ。

辰五郎　女みてぇな青白ぇツラだが、お前さん、なかなか威勢がいい。
だが、お前さん、どうも何か、大事なことを隠してやがるな。

花之助　ギクリ…。
辰五郎　てめぇのハラさらけ出して、俺の懐に飛び込んで来る根性見せろい。
花之助　…ハラさらけ出したら、巻いてるサラシが見えちまう…。
辰五郎　できねぇようじゃ世話はできねぇ。帰れ。
花之助　そこを何とか頼むぜ親分。

辰五郎　それが 江戸の火消しの心意気。
見返りなんぞは考えず　尽くす 真心　親心

辰五郎　江戸っ子に、同じ文句を二度言わせんな。

辰五郎、退場。おたま、花之助、残る。

おたま　（お茶を出しながら）さ、飲んだら帰った帰った。
花之助　帰らねぇよ。俺はここに入れてもらうんだ。
おたま　そんなにまで火消しになりたいなんて…よっぽど火事が好きなのね。
花之助　火事？　火事なんか好きじゃねぇ。火事だのケンカだのは大っ嫌ぇだ。
おたま　火事とケンカは江戸の華、なのに？
花之助　何言ってんだ。江戸の華といったら、両国の花火だ。
おたま　え、ちょ、花火！　花火スキなの！
花之助　いいねいいね！　あんた、わかってんねー！
おたま　なんだよ！　なんでいきなりグイグイくいついた？
花之助　あたしはね、玉屋の「おたま」ってもんさ。
おたま　玉屋？　玉屋といやぁ、江戸一の花火職人…。
花之助　「たーまーやー」でお馴染みの玉屋。
おたま　そこの一人娘の玉屋おたま。ピッチピチの１６歳です。
花之助　何で花火屋の娘が、火消しンとこで茶出してんだよ？
おたま　あ、そのへんデリケートでプライベートな話題なんで。
花之助　すみませんごめんなさーい。
おたま　けっ。聞きたくもねぇや…。
花之助　じゃあたしが聞く！　火事とケンカが嫌いなあんたは、
おたま　どうして火消しになりたいのさ。
花之助　歌だよ。
おたま　歌？
花之助　木遣りだ、木遣り。
花之助　火消しの衆はつとめが終わりゃ、景気よく木遣りを歌うだろ。
おたま　「イヨォー」ってな。あれをやりてぇのさ。
花之助　歌が好きなんだね。ちょっと聞かせてよ。
おたま　お、いいぜ。何がいい？　何でも歌ってやる…と言いたいトコだが、
花之助　長唄だの端唄は性にあわねぇ。「語り物」をやらせてくれ。

おたま　語り物…義太夫節だねっ。
花之助　どんなハナシが聞きたい？　人情ものか、軍記ものか。
おたま　ラブストーリー！
花之助　（少しがっかり）…そりゃそうか。
　若ぇ娘さんだもんな。色恋のハナシが好きなのは道理だ。
　好きっていうか…聞いたことが無いの。
おたま　え？
花之助　お父っつぁんに、そういうものを見たり聞いたするのは、
おたま　ダメだって言われてて…
花之助　そりゃまた、どうしてだい？
おたま　あ、そのへんはデリケートでプライベートな話題なんで。
　すみませんごめんなさーい。
花之助　けっ。聞きたくもねぇや…。
おたま　じゃあたしが聞く！　語ってラブストーリー！
花之助　花丸の三味線がねぇと調子が乗らねぇが…
　よーし。それじゃあ『艶容女舞衣（はですがたおんなまいぎぬ』酒屋の段！
花丸　よっ！
花之助　所は大阪・上塩町。
　酒屋の息子・半七は、お園という妻がありながら、
　女芸人・三勝と恋仲となり、お通という子までこさえるダメ男。
おたま　あらー！
花之助　そんな半七は、ひょんなことから人殺し。三勝との心中を決意する。
おたま　まぁー！
花之助　しかしそれでも女房・お園。自分に手も触れないような半七を
　「それでも夫」と一途に思う、泣かせる女のクドキの文句。
おたま　たっぷりと！
花之助　とうざい。このところお聞きに達しまするは『艶容女舞衣』。
　相つとめまする太夫、竹本花之助。
　三味線、鶴沢花丸。
おたま　え？
花之助　今はいないけど、いつも隣にいるんだ。
　まずはいよいよ酒屋の段。とうざい。とうざい。

「今頃は半七っつあん。どこにどうしてござろうぞ」…。

花之助、義太夫語りを聞かせる。

花之助　どうでぇ。面白かったか。
おたま　面白かった…。面白かったし、ときめいた！

花之助　そうかい。そりゃよかった。

おたま　ときめいて　ときめいて
熱くなる心　熱くなる身体
熱くなる両手から　ファイアー！

おたま、両手から火を放つ。

花之助　なんだこりゃ。火の玉だ。あちちちち！！！

おたま　胸がときめけばファイアー！
真っ赤っ赤なファイアー！
ファイアーが出る出る　玉屋のおたま！

駆け込んでくる辰五郎と火消したち。

辰五郎　な、なにやってんだ？　消せ！　消せ！（消火）
お前、何をしやがった？

花之助　何って…こいつのリクエストでラブストーリーを語ったのさ。

辰五郎　なんてことしやがる。てめぇみてぇな色男がラブストーリーを語ったら、
ハートが燃え上がっちゃうだろ。
ハートが燃え上がったら、指先から、火が出ちゃうだろ。

花之助　どういうことだよ！？

おたま　あたしは　玉屋の　おたま。

辰五郎・火消し　おたま。

おたま　花火屋の　娘。

辰五郎・火消し　むすめ。

おたま　何の因果か生まれつき　両手からファイヤー。

辰五郎・火消し　ファイヤー。

おたま　胸がときめけばファイヤー！
真っ赤っ赤なファイヤー！
ファイヤーが出る出る　異常体質。

花之助　化け物じゃねぇか。

辰五郎　それ以上言うな。回想シーンです。

回想。
おたまの両親、登場。

玉屋父　家中が、火薬だらけの花火屋稼業。
おたま　お父さん…。
玉屋母　このファイアー、は命取り。
おたま　お母さん。
玉屋母　うちにはおいておけないよ。
玉屋父　いつでも火が出てもいいように、
玉屋母　ファイアーすぐに消せるように
父・母　火消しの親分。新門辰五郎。
　　なんとかこの子の面倒を　見てください。

花之助　…お前も、親に、捨てられちまったんだな…。

辰五郎　胸がときめかないように、
　　キュンとするような物語からは遠ざけてるんだが…。
　　自分からラブストーリーをリクエストなんかしやがって！
　　危ねぇだろうが！

おたま　だって、親分。あたしは思春期真っ盛り。
　　恋とか愛とか興味あるんだもん。
　　もう興味津々です！

辰五郎　困ったやつだ！　もう尼寺に入れるしか道はねぇぞ！

おたま　ひぃー。

花之助　まぁまってくれ親分。たしかに、こいつぁ危なっかしい。
　　でもよ、恋をするのは若い娘さんの仕事。
　　それを無理にやめろとはひでぇじゃねぇか。
　　それに、お天道様からいただいた力だ。
　　何か人の役に立つかもしれねぇだろ。

おたま　そ、そんなに優しい言葉をかけてくれるだなんて…私、惚れました。
　　完全に惚れました。

花之助　え。

おたま　胸がときめけばファイアー！（火を出す）

辰五郎　わあああ！　消せ消せっ。（消した）
　　色男！　責任とって、おたまはあんたが面倒を見てくれ！

花之助　ええっ。

辰五郎　おたまはお前さんに惚れている。いつ火を出してもおかしくねぇ。
　　おたま専門の火消しになるのよ。
　　じゃあ俺を「を組」に入れてくれるのか。

花之助　この人、ずっと私の側にいてくれるの？

おたま　成り行き上だ。仕方ねぇ。

辰五郎

花之助　やったー！

おたま　胸がときめけばファイアー！

辰五郎　うおおおお消せ消せ！（消した）

花之助も消火に加わった。

花之助　「を組」の人間として火ぃ消したんだ。
心おきなく、木遣りを歌わせてもらうぜ。
イヨォー（歌いだす）。

おたま　素敵…。

花之助　人の目も気にせず、声を出せるってのは気持ちがいいぜ。イヨォー。

おたま　ちっちゃくファイヤー…。（小さな火を灯す）

【6】同場

芝晋輔、登場

晋輔　いい声だ！
花之助　あん？

晋輔　女みてぇな声。女みてぇなツラ。
なるほど、あんた見込みアリ。
役者にならねぇか。歌舞伎の役者に。
そしておいらと一緒に、盛り上げようぜ、お江戸の歌舞伎。

花之助　誰だ、てめぇは。薮から棒に
晋輔　俺の名前は「芝晋輔」。当世、鶴屋南北の愛弟子だ。
花之助　その歌舞伎の戯作者が、どうして町火消しなんぞに声をかける。
晋輔　新しい歌舞伎を作るため、新しい人材をスカウトしているんだよ。

晋輔　ケチな世直しの　あおりをうけて、
寄席も芝居小屋も取り潰し
團十郎だって　江戸から追放。こいつぁ歌舞伎の大ピンチ。
役者にならねぇか。歌舞伎の役者に。
だからおいらと一緒に、盛り上げようぜ、お江戸の歌舞伎。

花之助　勝手に盛り上がるな。
おたま　ちょっと待った。この人は町火消しなのよ。
そして、やがて私と結婚するかもしれないのよ。
花之助　え？結婚？ヤダうれしい！　ファイアー。（火を出そうとする）
おたま　やめろやめろ！　勝手に燃え上がるな！
晋輔　あーよかった。無事に消えました…ということなんで、この人は無理よ。
花之助　どういうわけ？
そもそも俺はよ、歌舞伎が大っ嫌ぇなんだよ。
晋輔　あんなもんの何が面白ぇのか、俺にはわからねぇな。
ちゃんと見れば良さがわかるさ。今度一緒に見に行こう。
花之助　そうだ『曾根崎心中』とか、どうだ？　泣けるぜぇー。
『曾根崎心中』だぁ？
あれは近松門左衛門が竹本義太夫の為に書いたんだ。
晋輔　もとは義太夫語りの芝居。
それをお前ら歌舞伎の連中が、自分たちのもんみてぇに言うんじゃねぇ。
近松門左衛門は、俺たちのもんだ。
……あんた何者だ？

花之助　はっ。
晋輔　ただの町火消しじゃねぇな。
花之助　い、いや…俺は…。
晋輔　義太夫か？　義太夫にしちゃあ、声が高ぇ…。
花之助　あ、あの…その…。
晋輔　（義太夫の節で）「今頃は半七さん…」
花之助　「どこにどうしてござろうぞ！」
晋輔　はっ。しまった、つい語っちまった…。
花之助　女義太夫だな。どうして男の格好なんてしてる。
晋輔　ワケありだ。深くは聞かねぇでくれ。
花之助　まぁワケありなのはお互い様だ。
晋輔　しかしあんた、なかなか面白い。よし、俺はあんたについていこう。
花之助　なんでだよ。
晋輔　一緒に、歌舞伎をやろうぜ！
花之助　歌舞伎と義太夫が手なんか組めるか。
おたま　それに、俺にはもう相棒がいるんだ。
花之助　え？　相棒？　誰？　女？　嫉妬のファイアー！（燃える）
おたま　妹だ！　妹だから、安心して！

どこからか、三味線の音色が聞こえてくる。

花之助　あ、この音色は…。
おたま　どうしたの？
花之助　これは花丸の三味線だな。
晋輔　何言ってんだ？　何も聞こえねぇぞ・
花之助　あの方角は…吉原だな。

【7】吉原・遊郭

花丸が、花魁たちに三味線の稽古をつけている。
そこに現れる火消しの格好の竹本花之助。

花之助　花丸っ。
花丸　姉さん。どうしてここが？
花之助　どうしてって、お前の三味線が聞こえてきたからよ。
花丸　ええっ。そんなに大きな音出してないはずなのに。
花之助　そんなことより、てめぇ、ナニしてやがる。
花丸　ナニって見ての通り、花魁の皆さんに、三味線のお稽古だよ。
花之助　いいか花丸。てめぇは天下一の義太夫語り、この竹本花之助の相三味線だ。つまりは天下一の三味線方。
花丸　いやぁそれほどでも…（照れる）。
花之助　そんなお前が、花魁相手に三味線だぁ？
花丸　天下一の三味線芸を、女郎屋の座敷芸に貶めるたぁ、どういう了簡だ。し、仕方ないでしょ。ヨソじゃ三味線弾けないんだもの。
毎日弾かないと指がなまるのよ。
花之助　それに…。
花丸　それに？
花之助　こういう、アルバイトしなきゃ生きていけないじゃない。
花丸　ご飯食べれないんだもん。
花之助　かーっ！　情けねぇ！　てめぇには芸人としての誇りってモンがねぇのか。
花丸　あるわよ。あるからこそ、コツコツがんばってるんじゃないの。
花之助　それに…花魁の皆さんだって、頑張ってるんだよ。
花丸　男の前でぐにゃぐにゃしてるだけじゃねぇか。
何も知らないくせに。
花魁として上に行くためには、踊りは踊らなきゃいけないし、
和歌に、お茶に、琴、三味線も。なんでもできなきゃいけないの。
同じ女として応援したくなっちゃうじゃない。
花之助　そうかい。そうかい、
花丸　ってか、姉さんだって、何なのそのカッコ？
花之助　火消しよ。今、町火消しの若い衆に混ざって、木遣りをうたってんだよ。
イヨォー。
花丸　天下一の義太夫が火消しの歌？
お師匠様が泣いてるよっ。
花之助　仕方ねぇだろ。こうでもして歌っていかねぇとノドが鈍る。
それに…。
花丸　それに？
花之助　アルバイトしなきゃ、生きていけねぇ。

花丸　それー！　それ私とおんなじ理屈じゃーん！
花之助　ごちゃごちゃうるせぇ！　それに火消しだって偉ぇんだぞ！
ケンカしてるだけかと思ったが、そうじゃねぇ。
厄介事や迷惑事を何でもどーんと引き受けて、町の連中の暮らしの為に、
ちゃきちゃき頑張ってんのさ。
花丸　あっそ。頑張ってないのは、姉さんだけってわけね。
花之助　ああ？　頑張ってんだろ、火消しの歌を歌ってよぉ。
花丸　義太夫なら義太夫語れよ！
花之助　床本がねぇと語れない！
花丸　情けないの！情けないの！
花之助　文句があんなら表に出やがれ！
花丸　文句あるわよ！　出てやるよ！
花之助　いい度胸だ！

やり手ババァ、登場。

ババァ　ちょいとご両人！　ケンカなら他でやっとくれ。
この吉原で騒ぎを起こそうってんなら、このババアが許さないよ。
花丸　す、すみません。
ババァ　あれ？　あれあれ？　ちょいとアンタ…その三味線は…？

ババァ、花丸の三味線を見て、

ババァ　花鳥！　花鳥の三味線じゃないかい。
花丸　あ、はい。そうです。
花之助　バァさん、あの花鳥とかいう花魁を知ってんのか？
ババァ　吉原で花鳥を知らないやつはいないさ。
この三味線、一体どうしてあんたが持ってんだい？
花之助　盗んだ訳じゃねぇぞ。
花丸　花鳥さんの切なる願い。それを叶えてあげるという約束で、
譲ってもらったんです。
ババァ　誰から？
花之助　誰からって、その花鳥からに決まってんだろうが。
花丸　召し捕りの時に偶然会ったんです。小伝馬町の座敷牢で。
花之助　十日くらい前かな。
ババア　…いや…そんなハズはないよ。
花丸　え？
ババア　花鳥はね…島抜けのトガで去年の春、千住小塚原で打ち首になったんだよ…。
花丸　ええええっ？
ババア　かわいそうに…まだ二十も半ばだった。もっと長生きしたかったろうに…。

花之助　何言ってんだバァさん。
だったら俺たちが小伝馬町で見たのは、何だったんだよ。
…花鳥の…ゆうれい…。
ババア　幽霊だぁ？　ハッハッハ。笑わせるんじゃねぇや。幽霊なんて、幽霊なんて…
花之助　（泣き出す）怖ええええ！
花丸　姉さんっ！　落ち着いて！
花之助　俺はよ、毛虫と雷と幽霊が大っ嫌ぇなんだよ…。
ババァ　この世にまだ、未練があるんじゃないかねぇ。
花丸　未練…それはきっと思い人、佐原喜三郎さんのことだね。
幽霊だろうが、女同士の約束だ。立派な三味線を譲り受けた恩返し、
なんとしても会わせてあげるよ、花鳥さん！
そうでしょう、姉さん！
花之助　お、お、俺は御免だ！　幽霊なんて…会いたかねぇや…！
花丸　何だい、意気地なし！

花鳥の亡霊、歌う。

花鳥　**からだは　からっぽ 空っ風**
こころ　こころこころ　ここになく
あなたに会いたい　それだけは
諦めきれなくて

迷子の恋心　あてどなく
最後の恋心　さまよう
満たされることはない

【8】町火消「を組」

辰五郎、おたまと花之助たち。

辰五郎　佐原喜三郎か…。よく知っている。男気あふれる、いい野郎だった。
しかし何だって、そいつの居場所を探してるんだい？
花丸　どうしても会いたいんです。
辰五郎　会いたい？　（おたまに）…お前はあっち行ってろ。

おたま、しぶしぶ退場。

辰五郎　なんだ、お前さん、喜三郎に惚れてるのか？
花之助　違う違う。会いたがってるのは、花魁の幽霊…。
花丸　姉さん。そんな話、信じちゃくれないよ。
花之助　どうすんだい？
花丸　私、喜三郎さんに惚れています。会いたいのでーす。ぐにゃぐにゃ。
辰五郎　そんなに惚れてるのかい。だが、、喜三郎は島抜けをした重罪人だ。
牢屋の深く深くに入れられて、どこにいるかはまるで検討がつかねぇ。
それに知ったところで、会えるわけねぇ。諦めな。
花丸　がっくり…。
辰五郎　あと、この話は…おたまに聞かせるなよ。
花之助　なんでだよ。
辰五郎　罪人に恋する女。そんなシャレたラブストーリー、おたまが聞いてみろ。
好奇心が暴走して、また火がついちまうだろ。江戸中大火事だ。
この話は、もうこれっきりにしてくれ。

そこに遠山景元、同心たちを従えて登場。

遠山　新門辰五郎。
花之助　あっ。お、お前は…。
辰五郎　お奉行様。こんな汚ぇところに、ようこそ起こしくださいました。
遠山　市中の安全、今日もぬかりなく見張っているな。
辰五郎　へぇ、それはもう。
遠山　（花之助らを見て）…なんだこいつらは？
辰五郎　うちの新入りとその妹です。
花之助・花丸　ど、どーもー。（顔を隠して）
遠山　今日、わざわざ足を運んだのは他でもない。
辰五郎。かねてよりお前が願っていた「両国の花火」のことだがな。
辰五郎　へぇ。
遠山　今年は、一切、取り止めと決まった。

辰五郎　ええっ。
遠山　花火はひとつもあげることはならん、とのお上のお達しだ。
辰五郎　そんな…みんな花火を楽しみにしているんですぜ。
遠山　やかましい。これが老中・水野様の世直し。
贅沢を禁じることで、お前たちがまともな暮らしをするようにお考えなのだ
辰五郎　そこをなんとか、曲げられねぇものですか？
遠山　そこを曲げでもしたら、儂は腹を切らねばならん。
花之助　（我慢できず）そんじゃ、腹でも切ってみせてくれよ。江戸の町民の為によ。
遠山　なんだと？
花之助　結局、お侍は、俺たちのことなんざ、考えちゃくれねぇ。
辰五郎　よさねぇか、色男。

花之助　偉そうに、俺はよ、医者と坊主と侍が大っ嫌えなんだよ。

遠山　このフレーズ…どこかで聞いたな。
花之助　あ…。

遠山　忘れもしない。奉行であるこの儂に、たてついたやつ。
花之助　そんなやつがいたのかい…。
遠山　名前は花之助。女義太夫・竹本花之助。
花之助　そんなやつがいたのかい…。
遠山　背格好も、同じくらい。よく似ている。
花之助　他人の空似ですよ。
晋輔　お奉行様。こいつは男だ。
遠山　小伝馬町の牢を抜け出し、今は行方知れず。

晋輔　（話を逸らそうと）あ！　牢と言えばお奉行様。
八丈島から島抜けした、佐原の喜三郎って男をご存知でしょうか？
遠山　ああ。知っているが。
晋輔　一体、今はどこにつながれてるんですかねぇ？
遠山　教えられるか、馬鹿者。やつは重罪人だ。
二度とお天道様は拝めまい。辰五郎、おかみの沙汰、伝えたからな。

遠山ら、退場。

花之助　助かったぜ、晋輔…。

【9】同場

花丸　でも、どうしたらいいんだろう。
喜三郎さんの居場所もわからず、会えそうにも無い…。八方ふさがりだ。

染之助、登場。

染之助　花丸。
花丸　お、お師匠さま。　一体、今までどこに。
染之助　芸の道を断たれた娘たちを皆、親元に帰したのさ。
なんとか御飯にありつけるうちは、御法度を犯すことはない。
そう諭し聞かせて、義太夫の夢を諦めさせた。
あとはあんたたち二人だけ。親元に帰さないとね。
花之助　なに言ってんですか。俺たちはみなしご。お師匠が親代わりでしょう。
染之助　だから、迎えにきたのさ。師匠じゃなくて、おっかさんとしてね。
花之助　やめてくれ。あんたは師匠、おれは弟子だ。
親兄弟の情けは受けねぇ。俺は日の本一の義太夫になるんだ。

染之助　（二人の様子を見て）…なにか困ってるようだね。
花丸　はい。かくかくしかじか…。
染之助　状況をすべて理解した。（理解したのだ）

花丸、三味線を掲げて

花丸　この三味線の恩返しがしたいのです。
芸人の分際で、おこがましいとは思いますが…。
染之助　何言ってんだい。
どんなに卑しい芸人だって、受けたご恩は返すもんさ。
花丸　しかし喜三郎さんがどこにいるのかわからないのです。
どうしたら見つけられるでしょう。
染之助　簡単なことだよ。呼べばいいじゃないか。
花丸　呼ぶ？
染之助　会いたいという素直な想いを素直に伝えなさい。
花之助　わっかりました。じゃあ、とびきり大きな声で呼びます。
喜三郎さーん。
染之助　黙りなさい花之助。大きな声なら伝わる？
そんなことは教えた覚えはないよ。
あんたが伝えなきゃいけないのは、花鳥さんの思いだろう。
花之助　思い？

染之助　時間も距離も　超える言葉
世界の果てまで 届く言葉
それは一体 どんなもの
吉原から遠く離れた場所で
花丸の三味線を　お前はどうして聞くことができたんだい？

花之助　なるほど、そうか。

染之助　それは、花丸の三味線に、花魁たちの想いが
宿ったからなのさ
心がなけりゃ 響かない
想いがこもれば どこまでも
誰のところにも届く
それこそが 本当のエンターテイメント

染之助　想いが宿ったお前の声で
作り物じゃない本物の芸で、花鳥さんの想いを歌いな。

花之助、花鳥の思いを歌う。
花丸が三味線を弾く。

花之助　からだは　からっぽ　空っ風
こころ　こころこころ　ここになく
あなたに会いたい　それだけは
諦めきれなくて

花鳥の幽霊、歌い出す。

花鳥　からだは　からっぽ　空っ風
こころ　こころこころ　ここになく
あなたに会いたい　それだけは
諦めきれなくて

迷子の恋心　あてどなく
最後の恋心　さまよう
満たされることはない

別場所に、座敷牢に入っている喜三郎。

喜三郎　この三味線の音色は…！
花鳥！　花鳥なのか！

花之助　何だこりゃ？　男の声が聞こえたぞ。
染之助　どうやら届いたようだね。

喜三郎　**からだに　金具が　からみつき**
こころ　殺され　これまでと
お前に会えない
花鳥　**あなたに会えない**
喜三郎・花鳥　**苦しさに**
花之助・喜三郎・花鳥
迷子の恋心　あてどなく
最後の恋心　さまよう
満たされることはない

花之助、はるか彼方にいる喜三郎に語りかける。

花之助　俺は花鳥じゃねぇ。花鳥の思いを語っただけの義太夫だ。
喜三郎　あんた、喜三郎だな。
いかにも俺が佐原喜三郎。
花之助　あんた、花鳥を知っているのか？
喜三郎　あぁ。１０日ばかり前に、ひょんなところで出会っちまってな
花之助　出会っただと。
花鳥の幽霊だ。幽霊になってこの世をさまよい、
喜三郎　あんたに会いたがっていた。
花之助　あぁ、花鳥。なんとか会わせてくれないか。
喜三郎　もちろん、そうさせてやりてぇが…あんた。一体どこにいるんだい？
花之助　わからねぇ。薄暗い座敷牢だ。
居場所がわからなきゃ、どうにもできねぇ。

おたま、登場。

おたま　なんて素敵なの！
花之助　おたま…。いつから聞いてたんだ。
おたま　頭っから最後までだよ。幽霊になってまで会いたいだなんて…なんて素敵。
身体は死んでも、恋は死なない！　ラブ・ネバー・ダイ！
そんなに素敵な人がいるの？
どんな人なんだろう？　会ってみたい…見てみたい…。
きっとすんごい格好いいんでしょうね！

花之助　お、落ち着け！盛り上がったら、たいへんなことに…！

おたま　胸がときめけば　ファイアー！

花之助　たいへんだ！江戸中が大火事になるぞー！

間。

花之助　…あれ？　なんだ、全然燃えてない…。

突如燃えだす、喜三郎の座敷牢。

喜三郎　あちち！　あちちちち！

晋輔　死してなお、花鳥が思いを寄せる佐原喜三郎。
おたまは、その面影を妄想するあまり、
その座敷牢を燃やしてしまったのだ。
おそるべし。生娘の妄想力！

花之助　…向こうから火の手が上がった…。

花丸　喜三郎さんはあそこにいるのね！行きましょう！

【１０】喜三郎の牢

消火活動をしている辰五郎たち。

辰五郎　どけどけー。「を組」のお通りだー。

辰五郎らに助け出される喜三郎。

辰五郎　お前は、喜三郎！
喜三郎　辰五郎親分！　お久しぶりです…。
辰五郎　無事で良かった。お前さんに会いたがってる女がいるんだ。
喜三郎　まさか、そいつぁ…
辰五郎　おい。こっちにこいっ。

花之助たち、登場。

喜三郎　（花丸を見て）誰だ、この、ちんちくりんは？
花丸　ちんちくりんとは失礼な。
花之助　お前に対する花鳥の思い。それを届けた泣き三味線。
演奏したのがこの女。日本一の三味線遣い、鶴澤花丸だ。
喜三郎　し、失礼しました。
おたま　（喜三郎を見て）この人が、佐原喜三郎さん…。
うーん、私のタイプじゃない！
晋輔　勝手だなぁ、娘さん。
花丸　姉さん。いよいよ大詰めよ。喜三郎さんの前で、もう一度、
花鳥さんを呼び出しましょう。
花之助　どうやって？
花丸　初めて会った時のことを思い出して。
私たちが熱唱したら現れたでしょ。
もう一度、歌って呼び出すのよ。
花之助　そうか。よし、それじゃあいくぜ！
花丸　待って！　なんでそんな格好なんかしてるのさ。
町火消しの格好なんかして、義太夫が語れるかい。
花之助　でも、俺が女だってことがバレちまうぞ。
花丸　バレるとかバレないとか、そういうレベルじゃないでしょ今！
牢屋とか燃やしちゃってんだよ！
晋輔　そりゃそうだ！
花丸　女義太夫としての一世一代のカタリ、聞かせてやるんだよ。
花之助　着替えてきまーす。（退場）
おたま　え？　え？　女？　どういうこと？

あの人、女なの？
花丸　おたまちゃん。そのへんについては、またあとで説明するから。（退場）
おたま　失恋…（がっくり）。

遠山、同心たちを従えて登場。

遠山　佐原の喜三郎。牢を抜け出す為に火を放ったか！
喜三郎　いや、花鳥のことを思う心。
遠山　それに火がつき燃え上がったのだ。
そんな火など、すぐに消してやるわ。花鳥は死んだ。
お前の恋は終わったのだ。
花之助　そいつぁ違うぜ！

戻ってきた花之助と花丸。
二人とも義太夫の裃姿。

遠山　お前は…竹本花之助…。
花之助　久しぶりだな…。

遠山　この女を捕らえろ。牢を抜け出した重罪人だ。
花之助　お願いだ、遠山。逢阪屋花鳥と佐原喜三郎。
この恋人たちの心を救えるのは俺だけだ。
俺に一曲、語らせてくれ。
遠山　黙れ。義太夫は御法度。お前は罪人だ。
花之助　俺はわかったんだ。
これまでの俺は　自分の為だけに義太夫を語っていた。
今は違う。この声で、誰かを救いたい。
遠山　芸人の分際で　偉ぶるな。
花之助　芸の力で、人の役に立ちたい。
遠山　義太夫など、三味線など、所詮は道楽。
花之助　世の為、人の為、それがエンターテインメント。
遠山　そんなもので、人が救えるものか。
染之助　救えるわ。

染之助、登場。

花之助・花丸　お師匠様…。

染之助　昔の話さ　昔の話さ
十二歳の女の子が　母親の病を治す
お金を稼ぐため　命がけで　義太夫を　披露した
禁じられた義太夫
「親孝行あっぱれ」と お上に特別に許された
少女はやがて　少女はやがて　染之助と名乗り
義太夫や三味線をやりなさいと 貧しい娘たちに 教えた
エンターテイメントで助かる 人生がある

花之助　そういうこった！　聞いたか遠山！

遠山　昔の話さ　昔の話さ

花之助　お。お前も歌うのか…？

遠山　一人の若い侍が　偶然目にした　耳にした
あまりに美しい 女の子の 義太夫に 恋をした
禁じられた初恋
「ふしだらだ けしからん」　お上にめっちゃ叱られた
侍はやがて　侍はやがて　お奉行様になり
エンターテイメントなど 見るなと 若い侍たちに 伝えた
エンターテイメントで傷つく 初恋がある

ぽかんとする一同。

花之助　遠山…お前、お師匠様への失恋が原因で、今みたいなキャラに？
遠山　その通りだ。
青春時代の哀しい思い出、それを作ったエンターテイメント。
一人残らず、根絶やしにしてやる。

花丸　ふん！あんたがいくら滅ぼそうとしたって、
エンターテイメントは無くならないわ！
…っていう気持ちを歌って、姉さん！（三味線を弾く）

花之助　お師匠に助けていただいた　この命
これさえあれば　なんとかなる　なんでもできる
花丸　たとえば三味線が無くても
花之助　手がある　指がある。
花丸　たとえば床本が無くても
花之助　舌がある　声がある。

花丸　何も無い時代　何も無いこの場所
花之助　それでも　心の中に　広がる　エンターテイメント
花丸　命さえあれば
花之助　心さえあれば生まれる。
二人　いつでもどこまでも　どこまでも　生まれる　エンターテインメント
やっていけるさ　間違いないさ
花之助　俺たちふたりなら
花丸　命さえ
花之助　心さえ
二人　あれば

歌に乗せて、花鳥が現れる。

花之助　で、出たー！　おばけだー！
花丸　花鳥さん。
花鳥　…ありがとう。あんたたちの熱い思いで、私はまた、現れることができたよ。
喜三郎　花鳥…。
花鳥　喜三郎さん…。

辰五郎　お奉行。花火だ。こんなロマンチックなムードには花火しかねぇ
遠山　ダメだ！　花火は御法度だ！
花之助　あげることはまかりならん。
遠山　血も涙もない野郎め。お前それでも人間か。
何とでも言え！
お前たちのせいで、わしの失恋の古傷も痛み出した…。
花火なんて絶対あげてやらんからな！

おたま、歩み出る。

おたま　お奉行！　失恋が怖くって、恋なんてできますか！
（花鳥と喜三郎に）わたしにまかせて。
失恋から立ち直った私が、お二人の為に、花火をあげてやりましょう。
辰五郎　火薬がなくて、どうやるんだ

おたま　愛し合う二人に教えてもらった　恋心
これさえあれば　なんとかなる　なんでもできる
辰五郎　たとえば火薬がなくっても
おたま　ときめきが 胸キュンが
辰五郎　たとえば火種がなくっても
おたま　ドキドキが　ハラハラが

辰五郎　何にも無い時代
何にも無いこの場所
おたま　それでも　手のひらから 広がる
ファイアー！　　ファイアー！

おたまの身体から、花火が打ち上がる。
驚き、見上げる一同。どこからか江戸の町人たちも集まってきた。

一同　たーまやー！！

おたま　恋に憧れる私
恋人たちの為に
もてる力のすべてを　今　ここに
ありのままの　姿　見せてやる

辰五郎　江戸の夜空に 狂い咲く
これが天下の玉屋の花火

晋輔　粋でいなせで いきいきと
生きる 世の中 いい気分

花鳥　あなたと夢見た　夏花火
喜三郎　お前と夢見た　夏花火
花鳥　寄り添う体は　ないけれど
喜三郎　心は　ふたつ　重なり合う

花之助・花丸　俺たちの想いは
誰にも止められない。

花之助　お奉行。
エンターテインメントを愛する俺たちの心、
取り締まれるもんなら、取り締まってみやがれ。
遠山　参った。…儂の負けだ。

遠山、同心たちと引き下がる。

花之助、花丸を中心に、歌い出す一同。

一同　苦しい今に うつむかず
空を見上げれば
大きな希望が 花開く
笑顔 こぼれだす
悲しい今に 落ち込まず
空を見上げれば
大きな夢が 花開く
明日へと

花鳥　ありがとう。花之助さん、花丸さん。
花之助　いや、礼を言うのは俺の方だ。
お前さんと出会えたおかげで、芸人の、本当の心を掴んだ気がするぜ。

花鳥、成仏する。

花丸　あれ？　三味線が無い…。

花丸の手元から、三味線も消えている。

一同　明日へと

【１１】明治

晋輔、客席に向かって語り出す。

晋輔　花鳥の姿と共に消えた三味線。
私たちが聞いていた音色は　幻だったのだろうか。
あたりには、火薬の匂いもない。
私たちが見ていた花火は　幻だったのだろうか
すべてはうたかた、夏の夜の夢

晋輔　時は移ろい、時代は明治。
文明開化の近代化、歌舞伎も女義太夫も復活したが
どうにも、こうにも、まだまだ生きづれぇ、息しづれぇ世の中だ。

花之助、芝居の台本を持っている。

花之助　「夏花火♥恋名残」？　なんだこりゃ
花丸　あの日の私たちのことを芝居にするんじゃないの？
花之助　どうして今さら、俺たちのことなんか。おい晋輔。
花丸　晋輔さん？

晋輔　晋輔じゃねぇ！　今や、河竹黙阿弥。天下の黙阿弥だ！
古今東西のエンターテイメント。
たくさん見聞きし、いろいろ書いたこの黙阿弥。
最後まで心の中に、残っていたのは一つだけ。
花之助、あんたと見た、あの日の花火だ。

花之助　はぁ？
花丸　晋輔さん…あんた、まさか姉さんに…。
晋輔　気づかなかったのか。一目惚れだ。初恋だ。
この恋を芝居にして、最高のエンターテイメントにして
成仏させてやりてぇのさ。

花之助　どいつもこいつも、
惚れたはれたと浮かれやがって、みっともねぇ。
浮かれるんじゃねぇ。浮つくんじゃねぇ。
沈んだ世の中を浮かしてやるんだ。
それが芸人ってもんだ。

（閉幕）